横浜市市民活動支援センター自主事業

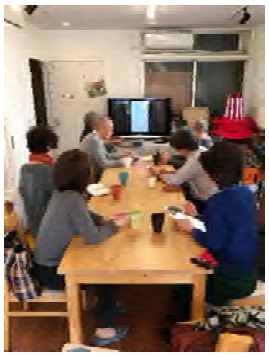
カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及　啓発冊子

cafe 型中間支援機能を考える

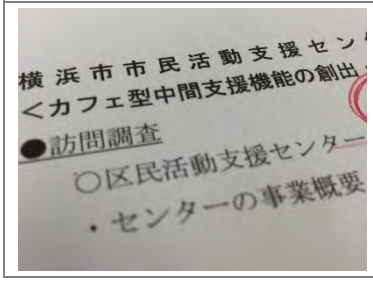
コミュニティカフェで中間支援機能を担い、

まちの交流や活性化を育みだそう

横浜コミュニティカフェネットワーク / 横浜市市民局



エルム × 地域
が出会うと何が起こる!?
2017.12.2(SAT) 18:30-20:30
Okeso


横浜市市民活動支援セン
<カフェ型中間支援機能の創出
●訪問調査
○区民活動支援センター
・センターの事業概要

区民活動支援センター

CONTENTS

第１章：コミュニティカフェについて

■コミュニティカフェが持つ、中間支援機能の可能性とは　4

■コミュニティカフェの定義　9

第２章：カフェ型中間支援機能とは？

■中間支援機能とは？　11

■コミュニティカフェが担う中間支援機能とは？

■カフェ型中間支援機能の事例　12

【事例１】コンシェルジュ事業・歩け歩けの事例：シェアリーカフェ

【事例２】キャンドルナイト in 港南台：港南台タウンカフェ

【事例３】パートナー制度：こまちカフェ

【事例４】港南台元気フォーラム：港南台タウンカフェ

第３章：カフェ型中間支援機能の創出強化普及事業について

■３か年の事業概要（背景・目的）　15

■本事業で得られた成果　18

①伴走会議　18

②価値の可視化～検討会ワークショップより　20

第４章：コミュニティカフェの事例紹介　25

参考：横浜コミュニティカフェネットワークについて　38

第１章：コミュニティカフェについて

■コミュニティカフェが持つ、中間支援機能の可能性とは

（2015 年度横浜コミュニティカフェネットワーク報告書コラムより一部抜粋）

1.「コミュニティカフェ」の定義　～横浜コミュニティカフェネットワークでの検討から～

この事業初年度目の 1 年間（特にその前半）、横浜コミュニティカフェネットワーク（以下、YCCN）で一緒に議論してきて、コミュニティカフェとは何か、どこが普通の喫茶店やレストランと違うのかを考えてきた。「コミュニティカフェ」の定義論である。民設民営の交流拠点のうちどのようなものが YCCN の会員になれるのかという実務的な観点からも定義論は必須であった。

いずれにせよ以下に明瞭な定義をしても、境界線上の事例は常にあり、コミュニティカフェと言えるのか言えないのか、悩ましい事例は常にあるだろう。しかし、だからこそ概念は、典型的な事例を念頭に置きつつ明晰に定義しておかなければならない。

YCCN での議論の結果析出されたコミュニティカフェの本質的特徴は以下のとおりであったと思う。

まず第一に「公開性」である。YCCN での議論でほぼ誰もが、コミュニティ・カフェの特徴であり魅力として、特定の目的を持っていなくても気楽に寄れる場として誰でも利用できるという点を挙げていた。

第二は「社会性」である。地域と社会につながる機会が用意されているということを意味する。おそらく、この第一と第二の特徴の結合が、コミュニティカフェの魅力であり重要性であろう。特定の公益的活動をすでにしている人や使命感・問題意識を持っている人たちだけではなく、どんな人でも寄ってこれる雰囲気でありながら、その人たちを地域課題の認識や解決に自然にいざなっていけるつくりになっているのである。

第三に、この二つの特徴を実現する一つの重要な副次的特徴として、「常設性」が求められる。特定の場所に立地していて、いつも（実際には週のうちのかなりの日にかなりの時間帯にわたって、ということだが）開いていて、人が常駐しているということである。これが、例えば地域福祉保健計画の取り組みの一環として定番的に取り組まれているサロン活動などと異なる点であり、むしろ人々はサロンを実践し発展させながら、常設であったらどんなにいいかと考えるようになるのである。

気軽に寄れて、そこに行けば誰かがいていろいろな話ができ、つながりづくりができる、というためには、やはり常設性が不可欠である。

今地域での活動は担い手の不足と高齢化が嘆かれていることが多い。一緒に考え活動していける仲間を増やすきっかけになる最適な場として、上記三つの特徴を備えたコミュニティカフェは適している。
しかし、こうした交流拠点は、現在のところ既存の仕組みとして（例えば行政の提供するサービスとして）確立していない。そこで、上記三つの特徴を持った場が有効であると気づいた開拓的な人たちが実験的に取り組んでいるわけである。既存の仕組みの側では、そうした開拓的な試みに対する補助金などが用意されているにとどまる。そうした段階においては、コミュニティカフェは民設民営の拠点となるほかない。
そこで、コミュニティカフェの定義の一環をなす第四の要素として、「事業性」が挙げられることになる。すなわち、民設民営の拠点を成立させるための収益事業を有機的に組み込んでいなくてはならない。コミュニティカフェはコミュニティ・ビジネスとして取り組まれる必要があるのである。そこには、取り組む人たちにとってややハードルの高い経済的リスクもある。
以上を要するに、コミュニティカフェとは、「公開性」「社会性」「常設性」「事業性」を有する交流拠点である、と定義される。

2.集会施設の歴史の中のコミュニティカフェ

(1)生涯学習的集会施設の時代

「コミュニティカフェ」とはどんなものを指すのかという定義問題が済んだところで、こうした特徴を持った交流拠点がどのような経緯で必要とされたかを、簡単に歴史を振り返って考えてみよう。
戦後日本の地域集会施設、交流拠点といえば、なんといっても「公民館」であろう。しかし、横浜は公民館を整備せずにきたので、これは省略しよう。ただ、この施設は、特に終戦直後の貧しい時代において多大の期待を持って運営され重要な役割を果たしたのであるが、交流の切り口となるテーマは、「社会教育」（のちの言葉で言えば「生涯学習」）であった点で、このあとの「コミュニティ・センター」と類似していたことを確認しておこう。
高度成長期が極点を迎えた 1960 年代末葉に、自治省のコミュニティ政策をはじめとして、各自治体が身近な地域社会を「コミュニティ」とよんで、政策的対応の対象にし始めた。この「コミュニティ政策」の主要な内容は、箱ものづくりであって、概ね小学校区程度の身近なエリアに「コミュニティ・センター」を整備する（そして多くの場合これの管理運営を地元の住民組織に委託する（現在の仕組みでは「指定管理」）というものであった。この場合も交流のテーマは社会

教育ないし生涯学習であって、空間の作り方としてはなるべく多くの空間を壁で仕切ってなるべく多くのグループに貸す、というコンセプトになりがちであった。しかしこれではまだ交流のない人たちと交わって顔の見える関係を作っていくというようになりにくいだろう。コミュニティ・センターは、したがって、気軽にふらりと寄る場所というよりは、仲間とともに学びの活動をしに行くところであった。

横浜市の場合は、戦後の接収や人口の爆発的膨張などの負の遺産を抱えたままであったため、身近な集会施設の整備は遅れた。それでも、1980 年代末に、地区センター、コミュニティハウス（当時は学校施設を活用したものが多かったので「コミュニティスクール」といっていた）、こどもログハウスといった主要地域施設の体系と整備目標が確立したが、ここでも、地区センターとコミュニティハウスは、生涯学習的テーマの施設であった。

(2)1990 年代からの変化

しかし、1990 年代に入りバブル経済崩壊による日本社会の大きな構造変化 （「右肩下がり」の時代）が訪れると、コミュニティ政策に、したがって地域集会施設に、考え方の変化が見られるようになる。ひとことでいうと、地域施設のテーマが地域福祉的なものにシフトする動き、さらには広く住民に自身の地域の課題解決活動を求める動きが見られるようになる。例えば北九州市は、公民館を市民（福祉）センターに看板替えし、その管理運営団体である「まちづくり協議会」に地域課題の解決のための活動を求めた。所管は教育委員会でも地域振興でもなく、保健福祉であった。

横浜でも、上記の生涯学習的施設体系とは別に、地域ケアプラザが整備され始めた。

さらに、課題解決行動を取ろうとする市民活動に、その特性に適した形で、拠点を提供する新しいタイプの集会施設である「市民活動支援センター」も登場した。1996 年に横浜駅西口という交通至便なところに神奈川県が提供した「県民活動サポートセンター」はそのはしりであり、その便利さに驚嘆した記憶を今も多くの人が持っているだろう。

既存の公民館やコミュニティ・センターの工夫も進んでいった。生涯学習機能ももちろん保持しながら、地域課題解決の機能をも重視した改修を行ったりする動きが静かに進行した。例えば、調理室を、料理教室にも食事サービスにも使いやすいようにするなどである。また、最近は、市民活動支援センターまがいの広い交流的オープンスペースをもつコミュニティ・センターも増えた。

生涯学習支援機能と地域課題解決機能の双方を重視した施設運営と、オープンな交流を可能とする空間づくりが今世紀の集会施設の特徴といってよい。今や、地区センター、コミュニテ

ィハウス、こどもログハウスはもちろん、例えば区民文化センターのような大規模で専門的な施設についてさえ、横浜市は指定管理の仕様書を通じて、地域交流の拠点となるべきことを要求している。地域ケアプラザについても、地域福祉保健計画のこの 10 年の取り組みを通じてその地域交流機能が飛躍的に高まったことはいうまでもない。

3.コミュニティ・カフェの歴史的意義 ～より開かれた「公共の場」を目指して～

(1)既存の施設に何が足りないのか

今や集会施設、地域施設は、ここまで地域のつながりを重視している。

にもかかわらず、ここに、地域交流の促進を求めて、経済的リスクまで背負って、コミュニティカフェを運営しようとする人々がいる。しかもそうした活動に対して、行政も助成金その他の様々な支援をしようとしている。

なぜであろうか？

ここまで集会施設が成熟し、整備されても、なおなにかが足りないのであろうか。

それはおそらく、既存の集会施設には、やはり用事のある人、目的意識を持った人しか行かないという限界があるためであろう。それは、すでに仲間となった人たちが、その仲間の力によってあることを成し遂げようとするために使う施設なのである。

(2)コミュニティカフェは「公共」の場

仲間だけで構成されるつながりが「共同体」（ゲマインシャフト）であるのに対して、「公共」とは、不特定多数の人々で構成される空間のこと（ゲゼルシャフト）である。

「共同体」つまり仲間は、きわめて重要である。それなくしては地域の課題解決もできない。しかし、仲間を見つける（拡大する）ためには、まだ仲間でない人と出会い、交流し、話をし、共通点を見出し、仲間づくりをしていく必要がある。

「公共」においては人々は他人同士なのだから、最低限度のルールとエチケットだけを共有し、人として尊重し合い、交流する。人は、仲間かどうかにかかわらず、単に「人である」というだけの理由で尊重される。こうした出会いを通じて仲間が見つかり、広がっていくはずである。

こうした「公共」の空間をわたくしたちはこの数十年の間に失ってきた。
コミュニティカフェに入れ込んでいる人たちは、こうした状況が地域のつながり（仲間づくり）の障害となっており、地域の希薄化につながっていることに、本能的に気づいている。
「顔の見える関係づくり」のためには、「まだ顔の見えていない人たち」と出会い、交流し、話をし、仲間になってもらわなければならない。しかし今、そういう人と出会う場がないのである。

(3)コミュニティカフェに注目する様々な人々

YCCN だけを見ても、コミュニティカフェは多様であり、いくつかの類型に区分できるように思われる。その精密な類型設定は来年度以降の課題としたいが、ソーシャルビジネス的志向からコミュニティカフェへと至ったもの、福祉的発想の活動からコミュニティカフェへと至ったもの、自治会・町内会の新たな展開を求めてコミュニティカフェへと至ったもの、などがあると思われる。
この類型ごとに、コミュニティカフェの意義の考え方や運営の仕方などに多様性があり、それがコミュニティカフェの奥深さにもなっている。しかし、上記の意味での「公共の場」を再建したいという本能的気づきは共通しているように感ずる。
今や地域のつながりづくりを、「まだ顔の見えていない人たち」に組織と場を開くことによって「顔の見える関係をつくる」というやり方で実践しようとする多くの人たちがいる。この人たちは、コミュニティカフェないしそれに類似したオープンな場づくりを志向している。

4.コミュニティカフェの中間支援機能は自然的に生ずる

コミュニティ・カフェの基礎的な特徴（「定義」）を確定し、それが生成してこざるを得なかった歴史の文脈を追い、その文脈の中で「公共の場」ということにコミュニティカフェの本質を見た。
ここまで見てくれば、コミュニティカフェが中間支援機能を持つというのは、ごく自然なことであることが理解されるだろう。YCCN が、「カフェ型中間支援」に着目して本事業に取り組んだのはやはり適切な着眼だったのである。
すなわち、上記の意味での「公共の場」の運営は、つながりづくりそのものにほかならないのである。不特定多数の人が交流する場を運営すれば、人と人のつながりの中間項・媒介項となる（自分自身は必ずしもそこで求められる課題解決の直接的な担い手にはならない）という機能を必然的に持つことになる。

YCCN のほとんどのコミュニティカフェがいわゆる「相談」業務を担っているのも、この意味で当然である。港南台タウンカフェも、港南区の区民活動支援センターのブランチとしての「相談」業務については独自な考えを持っているが、実際には結構な量の相談機能を果たしている。

また、コミュニティカフェは、「公共の場」として、多様な人が気軽にはいりこみ交わることによって、地域の諸団体が結びつくときのいくつかの機会を提供するようになる。まさに「カフェ型中間支援」である。港南台タウンカフェの、「地域元気フォーラム」や「キャンドルナイト in 港南台」の経緯にもそれがよく表れている。
コミュニティ・カフェが、そのもつ独特な中間支援的機能を果たすことを通じて、誰もが人として尊重される地域社会を築く機能を持つことが見えてきたのが、YCCN の今年度の実践的調査研究の成果だと言えるのではないであろうか。
（2015 年度横浜コミュニティカフェネットワーク報告書コラムより一部抜粋）

名和田　是彦(法政大学法学部教授)

■コミュニティカフェの定義

現在、国内でコミュニティカフェについての明確な定義はありません。全国コミュニティカフェネットワークを運営している公益社団法人長寿社会文化協会（WAC）では「地域社会の中で「たまり場」「居場所」になっているところの総称です。」と位置づけています。
YCCN では、下記のように定義づけを行いました。

●コミュニティカフェの定義

次の 3 要件を全て満たしている場

- **目的なく、誰でも利用できる**
- **飲食や物販、スペース貸など金銭のやりとりが可能である**
- **地域と社会につながる機会が用意されている**

筆者は自身でのコミュニティカフェ運営の経験や多くのコミュニティカフェ運営支援などから、コミュニティカフェについては以下のように整理してお伝えしています。

市民が自発的・主体的に、
カフェ的な場や空間・機能を活用して、
事業として、
自分たちの暮らすまちや地域に
必要なことや、課題解決を行うこと

つまりコミュニティカフェは、単なる居場所やサロン機能だけにとどまらず、地域交流や地域の課題解決の発見から実践、地域活性化などまちづくり活動の拠点や発信基地となりうる高いポテンシャルをもっていると言えるのではないでしょうか。

第２章：カフェ型中間支援機能とは？

■中間支援組織とは

中間支援組織は、市民団体や行政、大学、企業など様々な主体の間に立ち、情報収集・提供機能や、ノウハウや先行事例の提供、ネットワーク機能、コーディネート機能、行政に対する政策提言機能を持つ団体と言われています。

複雑化した地域社会が抱える課題の解決に取り組むためには、市民団体、行政、企業等が、それぞれの強みを出し合いながら課題解決に取り組む必要があります。そのような多彩な主体をつなぎ、連携を図り、自律的に課題解決ができるよう支援する役割や機能を持つ中間支援組織は今後ますます重要になってくると考えられます。

中間支援組織というと、ＮＰＯのサポートセンターや公設の市民活動支援センターやボランティアセンターが思い浮かぶと思います。しかし、市民活動団体の中には、個別の地域課題や社会的課題に専門性を発揮しながら取り組みつつ、様々な主体をつないだり、他団体にアドバイスをするなど、中間支援機能を行っているテーマ型団体も見受けられます。

■コミュニティカフェが担う中間支援機能とは？

(1)持ち込める力

カフェ利用者が自分の「やりたいこと（イベントの持込企画など）」や「こんなことで困っている」等をおしゃべり（相談）をしてきたり、同様のおしゃべりがお客さん同士でも行われている

(2) 関われる力

カフェの運営や既存活動、イベント事業の企画や運営に関わる機会が用意されている

(3)情報を提供する力

利用者の状況に応じて使える地域内外の情報を提供している

(4)つなげる・引き合わせる力

地域の人や団体同士を引き合わせるなど、ゆるやかなつながりをつくることがある

(5)地域づくりの対話を生み・社会に発信する力

暮らし・地域や社会の抱える課題について考えるフォーラムや勉強会を、周囲に呼びかけて開催することがある

■カフェ型中間支援機能の事例

カフェ型中間支援機能とは実際にどのような事例があるのでしょうか？以下に代表的な例を挙げてみました。

【事例１】コンシェルジュ事業・歩け歩けの事例：シェアリーカフェ

【事例２】キャンドルナイト in 港南台：港南台タウンカフェ

【事例３】パートナー制度：こまちカフェ

【事例４】港南台元気フォーラム：港南台タウンカフェ

【事例１】コンシェルジュ事業・歩け歩けの事例：シェアリーカフェ

シェアリーカフェはオープンしたときから、チラシ置き場にとくに制限を設けていなかったため、どんどんチラシが置かれるようになり、その場所は倍以上に膨らみ、常時 100 種類ほどのチラシがおかれている。田所承己氏調査でもダントツだったとのこと。行政の PR ボックスも併設しており、情報を得るために寄る人も少なくない。当カフェではカフェで行われるイベントには Facebook ページでの紹介の他、建物を管理しているハウスクエア横浜のイベントページにも情報提供しているため、広報に期待してカフェでワークショップなどを行う方も多く、少しでもお役にたてたらと努力している。

広報力がある、といううわさがひろまり、一例では、シニアを対象としたウォーキングクラブの参加チラシを置いたところ、1 週間の間に 2 名もが入会した、と喜びの声があった。この団体はこれをきっかけにシェアリーカフェで交流会を開くようになった。

■運営：2013 年 11 月～

■場所：市営地下鉄中川駅徒歩 2 分　ハウスクエア横浜内

■シェアリーカフェの広報

ホームページ（会員のみ）、Facebook、ハウスクエアイベント一覧、チラシ置き場（ハウスクエア建物内にもある）つねに 100 以上のチラシが届き、チラシ置き場に置いている

【事例２】キャンドルナイト in 港南台：港南台タウンカフェ

港南台タウンカフェが運営する小箱ショップの手づくり作家さんの何気ない一言がきっかけで始まったキャンドルナイト in 港南台。当初は呼びかけに応じた 5-6 人の作家さんやボランティアで始まったエコキャンドル作りやキャンドル点灯のイベントであったが、回を重ねるごとに関わる人や協力団体も増え続け、途中からは実行委員会組織となり、港南台タウンカフェが事務局を担う体制に変化してきた。現在では運営ボランティアやワークショップ参加者、出展団体、賛同事業者など多様な関わりで地域がつながる市民参画のイベントに成長を遂げてきた活動である。

■主催：キャンドルナイト in 港南台実行委員会

■開催：毎年 1 回程度　参加者約 2,000 名（2017 年度実積）

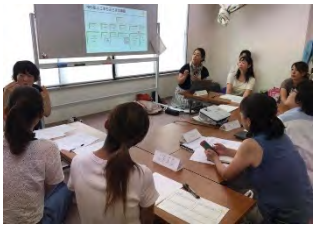
■スタッフ：実行委員約 15 名（高校生～シニア）、運営ボランティア約 40 名

■賛同団体：地元の団体や事業者・大型店など約 60 団体

■参加団体：約 10 団体がキャンドルづくりから当日のブース出展まで実施

【事例３】パートナー制度：こまちカフェ

2015 年秋に始まったパートナー制度は、こまちぷらすの理念に共感し自身の「できる」や「やりたい」を模索し掛け合わせながらスタッフと共に活動を推進していているボランティアメンバーである。登録数は 100 人程おり、現在はこの制度に加え、研修を受け相互メンタリングしながら「パートナーぷらす会員」も 40 人程している。「自分のやりたいはなんだろう」とトライアンドエラーしながら模索できるということ、そこにこまちぷらすのコーディネーターが面談を実施、または、他のパートナーが相互理解をしながら伴走していることが特徴だ。現在は、パートナーの方々が後援事業や企業とのコラボまでも主導するなど、市民がその「やりたい」気持ちを徐々に整理し、団体内外の一緒に協働・連携したい相手を見つけることができるようカフェが伴走している。



■開催頻度:パートナー登録会毎月 1 回、パートナーぷらす会員交流会毎月 1 回
（半期毎に会員募集、会費 3000 円）

■登録者数: パートナー登録数（約 100 名）

■パートナーの企画実施時連携先：企業、他 NPO、行政等

■実施内容：様々な入力作業、事務的な補助作業、6 人規模～400 人規模までのイベントの企画立案及び実行等

【事例４】港南台元気フォーラム：港南台タウンカフェ

港南台タウンカフェの運営を協働で行っているまちづくりフォーラム港南は、港南台タウンカフェ開設前から NPO や地域活動実践者、自治会町内会、商店街、行政、市民参画のまちづくり実現のために学び合いの場を運営してきた。そして港南台タウンカフェ開業後も 2007 年以降毎年地域元気フォーラムを開催している。スタイルは様々で、講演会やパネルディスカッション、ワークショップなどその時のテーマやねらいに合わせて実施。このフォーラムを通して地域のつながりづくりのきっかけになる事も多く、港南台タウンカフェが行う地域交流活動の柱とも位置づけられている。2016 年度は地元連合自治会との共催という形で実施できたことは大きな成果であろう。

■主催：株式会社イータウン

■共催：港南区：区民活動支援センターブランチ事業として実施

■開催：毎年 1 回程度　参加者 40 名～80 名程度

第３章：cafe 型中間支援機能の創出強化普及事業について

■３か年の事業概要（背景・目的）

横浜コミュニティカフェネットワークでは 2015 年度より３カ年にわたり、横浜市市民局と協働事業として、カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及事業を実施してきた。

今回取り組んだのは、下記の図に示されるように個別カフェの支援力強化と、当団体自身の支援力強化である。具体的な事業について下記に記す。

【背景】

・市内各区では、区民活動支援センター・区社会福祉協議会・地区センター・地域ケアプラザ・コミュニティハウスなどの施設が、団体や住民の活動拠点となっている。

・この 10 年ほどの間に「コミュニティカフェ」という新たなスタイルの地域拠点が市内に次々生まれている。飲食を伴わないカフェ的な場も含め、形態も交流型・テーマ型・事業型等、多種多様だ。

・「目的を持たなくても利用できる」カフェは敷居を低く、多様な利用者に、居場所や情報、地域での役割（出番）も提供している。また、団体の運営支援やネットワークづくり、連携のコーディネイト等、中間支援機能を果たす要素を内在している。

・市内に早期に開設されたカフェでは、エリアマネジメント、ネットワークづくり、団体運営相談等、既に中間支援役割を果たし始めている。この数年は、横浜市まち普請事業を活用し地域づくりを意識して開設するカフェ等も増えて、そうした中間支援志向のカフェに、支援機能の強化ニーズが出てきている。

【事業の目的】

・本事業では、カフェが中間支援役割を果たす意義や支援機能充実のために必要な要素、持つべき力量等を整理し、カフェの現状や課題・ニーズを確かめ、「市内のコミュニティカフェが中間支援組織として力をつけるための支援」と「当ネットワークが個別カフェを支援する中間支援力の向上」の両方を目指す。

・また併せて、中間支援機能を果たすコミュニティカフェと、区民活動支援センターを初めとする区域の中間支援組織や活動拠点との連携のあり方も考える。

【事業の概要】

2015～2017 年の３か年で、下記の事業を行った。

１.先進事例研究（2015 年、４回）

既に中間支援機能を果たすコミュニティカフェの事例から、成功要因やその機能を把握し、カフェが中間支援機能を持つ意義や役割、持つべき力量を整理。

２.カフェ支援会議

（2015 年カフェ支援会議・2016 年はカフェ伴走会議として実施、計４団体）

中間支援組織を志向するカフェ運営団体に対し、既に中間支援機能を持ち得ているカフェ関係者が伴走者となり支援を行った。個別カフェの支援機能強化と同時に、団体支援を通じてネットワークの支援力向上も図った。

３.公開フォーラム開催（2015 年・2016 年、年１回、各回 60 名規模）

「先進事例研究」と「カフェ支援会議」で把握された成果について報告共有の場をつくり、コミュニティカフェの中間支援機能に関する理解と、関心層を広げた。

４.コミュニティカフェ訪問調査（2016 年、12 か所）

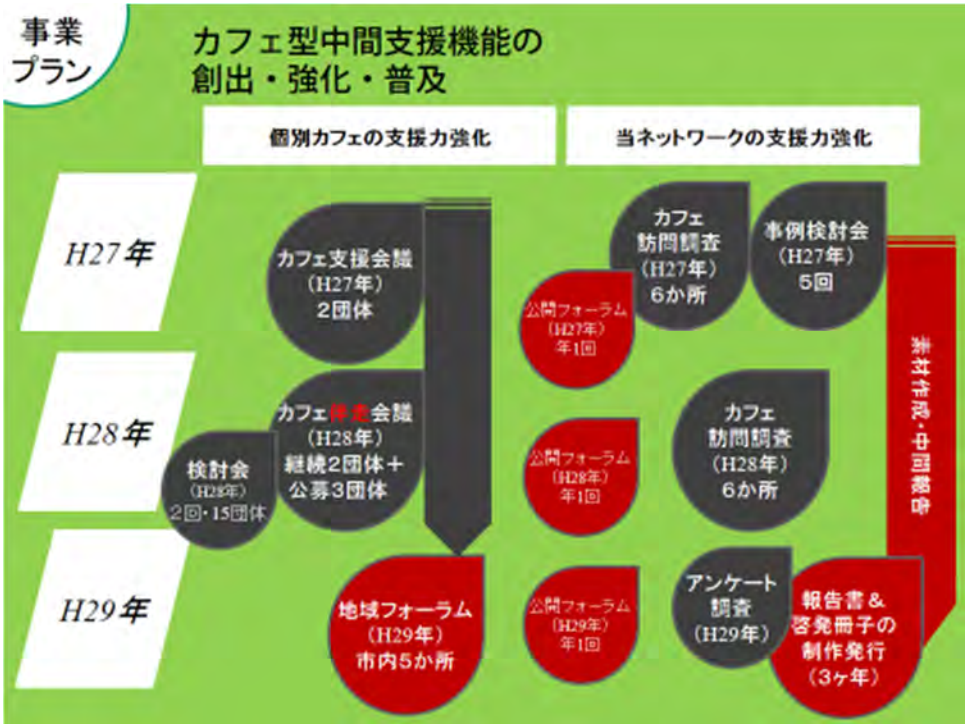
初年度に整理した視点を基準に、横浜市内各地のカフェがどのように中間支援役割を果たしているのか、課題やニーズ等、訪問して現状を把握した。

５.地域フォーラム開催（2017 年、市内４か所）

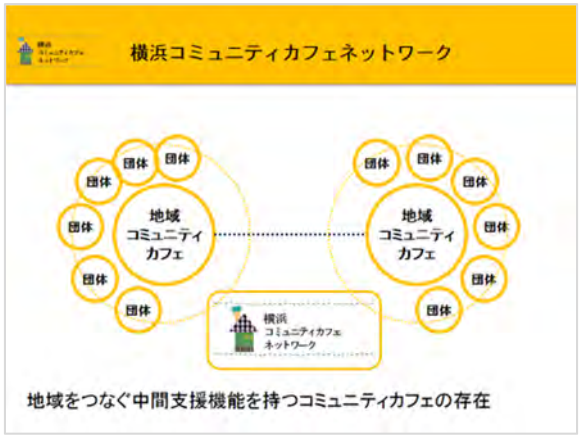
「カフェ支援会議」の支援対象カフェが、各地域で多様な主体と連携した地域フォーラム（自主勉強会）を開催し、具体的な中間支援の力量形成・支援基盤強化に取り組む。カフェ支援会議の支援者が、継続して助言をした。

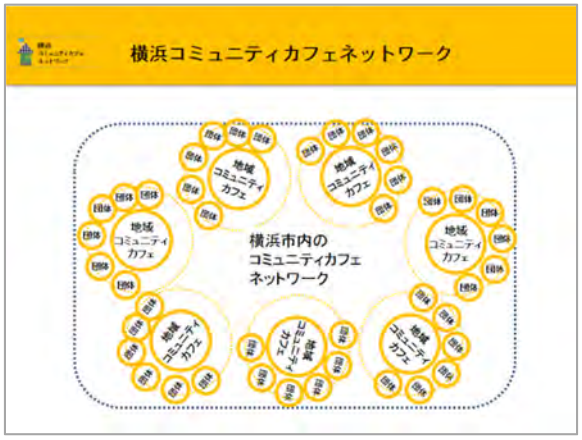
６.報告書、啓発冊子の制作発行（2015 年、2016 年、2017 年）

事業成果（コミュニティカフェが中間支援機能を持つ意義、中間支援機能や役割の整理、コミュニティカフェでの支援の実際、事例等）を年度ごとに記録し、３年目に報告書（無料配布）と啓発冊子（有料頒布）の２種類を発行した。


事業プラン
カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及
個別カフェの支援力強化
当ネットワークの支援力強化
H27年
H28年
H29年
カフェ支援会議（H27年）2団体
カフェ拡充会議（H28年）継続2団体＋公募3団体
検討会（H28年）2回・15団体
地域フォーラム（H29年）市内5か所
公開フォーラム（H27年）年1回
公開フォーラム（H28年）年1回
公開フォーラム（H29年）年1回
カフェ訪問調査（H27年）6か所
事例検討会（H27年）5回
カフェ訪問調査（H28年）6か所
アンケート調査（H29年）
報告書＆啓発冊子の制作発行（3ヶ年）
素材作成・中間報告

・目指すべき姿


横浜コミュニティカフェネットワーク
地域コミュニティカフェ
団体
横浜コミュニティカフェネットワーク
地域をつなぐ中間支援機能を持つコミュニティカフェの存在


横浜コミュニティカフェネットワーク
横浜市内のコミュニティカフェネットワーク
地域コミュニティカフェ
団体

■本事業で得られた成果

①伴走会議

伴走会議は、５つのコミュニティカフェの中間支援機能の強化に、YCCN メンバー数名が伴走することによって、個別カフェの力量向上と、YCCN の支援力向上の両方を狙って実施をした。

＜実施概要＞

●伴走会議受入カフェ（カッコ内は、区・伴走開始年度・伴走期間）

１　シェアリーカフェ（都筑区・2015 年～・3 か年）

２　大倉山おへそ（港北区・2015 年～・３か年）

３　ハートフルポート（旭区・2016 年～・2 か年）

４　反町駅前ふれあいサロン（神奈川区・2016 年～・２か年）

５　コミュニティサロンおさん（南区・2016 年～・２か年）

●実施経過

・初年度（2015 年度）

本事業企画段階で受け入れを想定（希望されていた）２つのカフェ（シェアリーカフェ、大倉山おへそ）で伴走を開始し、各カフェに２～３名を伴走担当として実施した。各カフェの状況に応じて３～４回の会合やワークショップ、個別の連絡打合せを行った。

・2 年目（2016 年度）

２つに加えて、新たに３つのカフェを伴走先として追加することとし、受入れカフェを公募した。3 団体からの応募があり、選考を経て３つのカフェへの伴走を決定、各カフェに２～３名の伴走担当者を置き、３～４回の会合やワークショップ、個別に連絡打合せを行った。

・３年目（2017 年度）

５つの伴走先カフェの集合研修（コーディネイトの活動事例に学ぶ・各カフェの取組み共有と学びあい）を実施。各カフェの状況に応じて、１～２名の担当者が連絡打合せを行いながら、各地域で「地域フォーラム※」を開催した。

※地域フォーラム

カフェが立地する地域づくりや独自テーマを設定して、多様な参加を得ながら、コミュニティが持つリソースの共有と今後の展開について考える場を、伴走受入れカフェが中心となって企画コーディネイトし実施するもの。

●伴走会議の成果としての「地域フォーラム」について

「住み開きフォーラム」「音楽によるまちづくりイベント」「地域リソースの発掘共有ツアー」「区内コミュニティカフェが集う地域づくりフォーラム」「商店街と地域住民をつなぐまちづくりワークショップ」など、それぞれのテーマで、１～２回ずつのフォーラムを開催した。実施のために別財源を確保する、事前に下見を実施することで関係者にコンセプト共有し関係性を深める、カフェ内部で地域づくりに対するスタンスについて話し合うなどの準備が行われ、その実施を契機に、新たなリソースや経験を獲得、一定の力量向上ができたように思われる。

●伴走会議から見えてきた「伴走支援」のポイント

①　支援のねらいの理解度

伴走支援がどういったねらいで、何を目指すものなのか、カフェの責任者はもちろん、カフェ関係者が十分理解した上で、支援が実施されることは大前提として重要である。

②　一定期間の継続関与

今回の伴走会議は、中間支援機能の強化がテーマであったが、伴走に入った初期は、どのカフェも、経営面の不安や組織体制・外部との協力関係に、課題などを抱えており、そうした課題や不安の共有なしに中間支援機能強化を検討する意識をつくることは難しかった。半年から１年は、経営・組織課題を「整理」することの時間を要した。こうした本来テーマの支援に入る「準備期間」的な時間を一定の長さで持つことで、伴走担当者との信頼関係づくりや中間支援機能に取り組む姿勢を整えることにつながる。

③　第三者性

伴走受入れカフェの中でも、スタッフ間で「カフェへの思い入れや優先度」、「カフェ型中間支援に対しての理解度」に違いがあり、中間支援経験や外部ネットワークを既に有するメンバーとの温度差があった。コミュニティカフェは、勤務体制にボランティア要素が強く、縦型でなく横型の民主的な合意形成スタイルが多い。コンセプトやカフェ型中間支援機能の意義、力量形成のモチベーション向上を内部だけで行うことは難しい。「伴走会議」をきっかけに、外部から来る第三者の関与で、話し合えることや共有できるものがあり、その意義は大きい。

④　当事者性

日常のカフェ営業やイベント実施の合間に、伴走会議の受入れや内部打合せ、地域フォーラムに関する調整を行うことは、現場に相当な負担感がある。内部スタッフとの合意形成も、カフェ責任者にとっては、気をもむ要素の一つでもある。そうした負担感を感覚的に理解でき、かつ現場側からが「理解してもらえる」と感じ支援内容を受入れられるのは、実際にカフェを運営す

る実践者が、伴走に入る意義である。（その場合、伴走に入る実践者が、中間支援力を一定以上有していることが前提）支援に入る側にとっても、自カフェを客観視する機会になり、相乗効果が得られる。

②価値の可視化～検討会ワークショップより

2015 年度：中間支援機能整理及び、価値の可視化の必要性の認識

・2015 年に事例検討会を実施し、コミュニティカフェの中間支援機能に期待される要素を整理した（表 1 参照）。その際に、「評価指標がなく意義や成果の可視化が難しい。参加人数、売り上げでない評価指標の必要性を感じる。」「相談者は『支援してもらった』意識がないため、評価しづらい」といった課題が浮き彫りになった。また、「カフェの認知、カフェに対する信頼、地域参加率等の数値化」「他者のために行動することが自分にとって楽しいと思うと思った人がどれだけ増えたか調査」等コミュニティカフェオーナーならではの視点での、価値可視化のアイディアも多数出てきた。（2015 年度報告書 P.14）

表１：コミュニティカフェの中間支援機能に期待される要素

【カフェ型中間支援機能に期待される要素】　20151129YCCN

カフェ名称：

①理想→あなたのカフェにとって、各要素の重要度合を1～4で記入ください(4が一番重要度が高い)

②現実→あなたのカフェが現在有していると思われる力量度合を自己診断して1～4で記入ください

			初期	現実	理想
空間・場づくり	1	誰でも入りやすい場・歓迎する人が、日常的にあること			
	2	お客さん同士が、いつも話しやすく、つながりやすい雰囲気になっている			
	3	ゆるやかな場づくり、誰ともつながらないことも受け入れられる			
スタッフの意識や力量	4	お客さんのニーズ（抱えている課題・期待）の見極め			
	5	お客さんやボランティアが持っているスキルや能力などを引き出す（エンパワメント）			
	6	聴くこと共感すること、一緒に困る・考える、学び知ろうとする姿勢			
	7	支援する・されるという関係性を固定しない（お互いさまの関係づくり）			
	8	コーディネイト（人と人をつなぐ、異なる相談をつなぐ、他分野への働きかけ）			
	9	カフェスタッフ各自が持っているネットワーク・リソース・関心事の把握			
	10	スタッフ一人一人が持っている、情報、ネットワークを、全体で共有し活用する			
	11	中心スタッフが、地域(テーマ)への思い入れを持っている			
	12	個人の困り事を、みんなの困り事や地域の課題として捉える			
運営組織の力量	13	カフェスタッフを信頼して任せる、感謝する・評価する			
	14	地域課題を把握していること			
	15	地域課題を先に読んで解決する。半歩先の課題を見つけられるセンス			
	16	地域の動きが見える（情報が集まってくる）			
	17	まちや社会に必要な仕組み・機能を創出する意識			
	18	カフェが持っているテーマからさらに広がりをもとうとする意識			
	19	行政・他団体との連携と協働を志向している			
	20	活動蓄積による（地域や他組織からの）信頼			
	21	まちづくりや地域課題解決の担い手を見つけ育てる意識			

（2015 年度報告書 P.16）

2016 年度：価値の可視化検討会の実施

・上記 2015 年価値の可視化の必要性を踏まえ、2016 年度において、「価値の可視化検討会」を多様な YCCN 会員（コミュニティカフェの代表者ら）が集まり 2 回開催した。

１回目においては、コミュニティカフェの成り立ちや形態、利用者が重視する価値が

それぞれ異なるものの、共通項目となる評価項目の整理をした。

その結果、
①カフェに対する期待：相談件数、視察件数
②透明性：数値（収支）、事業報告
③共感：ボランティア数（のべ）、ボランティア活動時間数（のべ）、寄付額
④自己実現行動：貸しスペース件数または時間数
⑤変化：中間支援の結果（事例）
といった５つの指標に整理された。

②－④については、対外的な説明に有用であり、①、⑤、⑥は対内対外双方にとって重要な指標であるということを整理した。
２回目の検討会においては、下の表２のように５つのカフェオーナーがこの評価項目に照らし合わせて実施有無、記録有無、資料有無という３つの軸で評価実現可能性について整理をした。

表２：価値の可視化

		実施有無	記録有無	資料有無
カフェに対する期待	相談件数（年間）	5	2	0
	視察件数（年間）	5	4	2
透明性	数値（収支）	5	5	5
	事業報告（実施時期や方法）	4	4	4
共感	ボランティア数（のべ）	4	4	3
	ボランティア活動時間数（のべ）	4	4	3
	寄付額	4	4	3
自己実現行動	貸しスペース件数または時間数	5	5	3
変化	中間支援の結果（事例）	６）参照		
上記以外の指標	共通	・利用者数・購入者数・地域の人からの理解（町内会、商店街）・地道な毎日の質的な評価・生み出された事業や活動数・チラシラック活用件数・ブランチ事業・事務局機能数・表彰件数・協同事業数・メディア掲載数・ウェブアクセス数・団体NPOの利用件数・ネットワーク（他団体との）・地縁組織や行政とのつながり具合・情報発信量・営業日数・利用の世代等		
	個別	・一般の方の入りやすさ（障がいの方用の施設と思って入りにくい等ないか）		

・表にある通り、上記以外の必要な指標案として「地域の人からの理解」や「多団体とのネットワーク」「生み出された事業や活動数」等の項目も新たに浮かびあがってきた。また、一つ一つのカフェ特有の事業に照らし合わせた評価項目を立てることの重要性も見えてきた。

・特に「変化」の項目においては、①お客様自身の変化②新しいつながり③地域の方の意識の変化④運営者自身の変化⑤生み出された地域の機能⑥地道な日常の評価という６つのカテゴリーに整理し、丁寧に拾うことの重要性を改めて認識をした。中でも日常的に場を開き続けることへの評価の重要性、また、第三者からの評価の重要性も再認識した。

2016 年度：公開フォーラム

・上の検討会を経て、２０１６年度末に実施した公開フォーラムにおいては、キャッシュポイントのない中間支援機能をどう継続していくのかについて議論がなされた。

・そこへ公的支援が入ることや、民間支援（協賛や寄付等）によって支える等、カフェによってさまざまな選択肢があり得ることが整理された。

・公的支援が入ることの意義としては、目的／意識化していない人にリーチできる価値や無関心層の掘り起こし機能等があげられた。

・また、その検討や実施をカフェ単体ではなく、様々な連携の中で実施することの重要性も確認した。中でも、区民活動支援センターとの連携を深めることが大事であることや、区民活動支援センターのブランチ化が尚必要であるということも提案としてあげられた。

第４章：コミュニティカフェの事例紹介

横浜市内のコミュニティカフェ紹介

YCCN 会員と、本事業関連の常設コミュニティカフェを紹介するコーナーです。

青葉区	３丁目カフェ
	スペースナナ
旭区	ハートフル・ポート
	地域交流拠点ひまわり
	ほっとさこんやま
神奈川区	反町駅前ふれあいサロン
金沢区	さくら茶屋にししば
	ほっこり
	UDCN 並木ラボ
港南区	港南台タウンカフェ
港北区	大倉山おへそ
	街カフェ大倉山ミエル
都筑区	いのちの木
	シェアリーカフェ
鶴見区	KOTOBUKI
戸塚区	こまちカフェ
	コミュニティカフェ夢みん
	ふらっとステーション・とつか
	ふらっとステーション・ドリーム
保土ケ谷区	ハッピースクエア
南区	コミュニティサロンおさん
	はまどま
	カフェらいさー

３丁目カフェ　【青葉区】

運営	株式会社３丁目カフェ
所在地	青葉区美しが丘 1-10-1　ピースフルプレイス１-B（東急田園都市線たまプラーザ駅徒歩５分）
開設	2014 年８月
営業日	・ホール貸切営業：１年 365 日 10:00 ～ 22:00　・カフェ営業：火曜～金曜 10:00 ～ 18:00
スタッフ	有償常勤マネジャー１名、有償スタッフ 15 名（パートさん、シフト制）
特徴	当初美しが丘３丁目の住宅街に、近隣の高齢者に休息・交流の場所を提供する小さなカフェを開く予定が、地区計画など課題をクリアするためには十年以上必要となるため待ち切れず、代替に開設が容易な商業地域１丁目に、比較的大型の商業店舗を賃借して開店。 カフェの目的は地域の交流拠点となること。現在年間延べ数で３００団体１万人が利用。利用目的では、あらゆるジャンルの音楽ライブ、パーティー、講演会、映画会、謝恩会、新年会、送別会、ワークショップなどとなっている。また利用団体別では、近隣の保育園・幼稚園・学校、地域企業、趣味の団体、スポーツ少年団、音楽教室など。今後は地域文化交流のための、講演会、映画会、講習会、演芸などを増やしていく。

スペースナナ　【青葉区】

運営	ＮＰＯ法人スペースナナ
所在地	青葉区あざみ野 1-21-11（田園都市線・横浜市営地下鉄あざみ野駅徒歩６分）
開設	2010 年 12 月
営業日	月曜・火曜定休（土・日・祝日も営業）11:00 ～ 18:00
スタッフ	常勤０名、非常勤０名、有償ボランティア０名、ボランティア約 20 名
地域連携	商店会、市民活動団体、男女共同参画センターなど
まちの事務局機能	「地域でゆるやかにさえあう場をつくろう」をコンセプトに、社会的課題を共に考え、解決していけるようなコミュニティづくりをめざして、関心のある個人、団体などと連携をすすめている。
特徴	世代を超え、性別、国籍、障がいのあるなしに関わらず、多様な人々が出会い、つながりを持ち、元気になれる場所やゆるやかに支え合う仕組みをつくろうと、集った市民が開設。カフェの他に、ギャラリーやフェアトレードショップ機能を持ち、独自企画や市民の持ち込み企画を実施。ジェンダー、はたらく、教育、福祉、市民活動、セクシュアリティなどに関わる書籍の編集・出版を行う有限会社が事務所を置いている。

ハートフル・ポート 【旭区】

運営	個人（五味真紀）
所在地	旭区南希望が丘 58（相鉄線希望が丘駅徒歩 10 分）
開設	2014 年 6 月
営業日	月・火・木・金 10:00 ～ 17:00
スタッフ	オーナー 1 名、非常勤 3 名、有償ボランティア 1 名、ボランティア 15 ～ 20 名（みなと食堂、みなとの茶店）
地域連携	南希望が丘地域ケアプラザ（認知症カフェ「みなとの茶店」の運営）／ NPO 法人活動ホームふたまたがわシュガーポット／地域で音楽活動をしている音楽家で作る実行委員会・商店街とのコラボで、「音楽で街を元気にするプロジェクト」がスタート／地域活動に興味のある人達が集まる場として、緩やかな連携が始まっている。
まちの事務局機能	地域で高齢者の生活支援を行う「ちょこっと応援団」の事務局をオーナーが担う。活動の一環として定期的に利用してもらっている。地域で活動する他団体・人同士をつなげる働き。認知症の方の見守り・声掛け。
特徴	住宅街の２世帯住宅一軒家の一部を改装し、住み開きとしてカフェを運営。店主が培ってきた地域のネットワークをベースに、地域住民が口コミで利用を広げており、居場所的機能も有している。飲食提供・作業所製品等の物販の他、市民活動や地域情報のチラシ等の配布、テーマを決めたおしゃべり会や音楽コンサート開催など、住民が参加して楽しむだけではなく、地域の中にある人材を活かして、住民自らが活躍できる場、文化的な発信ができる場にもなっている。「家」という環境で、多世代近居型の交流・学びの場づくりを大切にしている。みなと食堂（子ども食堂）、みなとの茶店（認知症カフェ）も開催。

地域交流拠点ひまわり 【旭区】

運営	認定 NPO 法人　若葉台
所在地	旭区若葉台 3-5-1（若葉台団地ショッピングセンター内）
開設	2010 年 10 月
営業日	月～金 10:00 ～ 18:00
スタッフ	常勤０名、非常勤０名、有償ボランティア２名、ボランティア約２０名
地域連携	住宅管理組合協議会や連合自治会、県公社、まちづくりセンター 、学校等
まちの事務局機能	地域多世代交流拠点、高齢者等買い物サービス事業、 住民主体の生活支援、見守り
特徴	高齢化が進む団地の中で、地区社協が中心になり、高齢・障害・子育てと、特別な支援を必要とする人向けの福祉事業を検討、事業主体として NPO 法人を設立した。「ふれあいわかば」は、安否確認と交流を目的に横浜市高齢在宅支援課事業として開設。「日本茶と笑顔のおもてなしと傾聴」をキャッチフレーズ に、お茶を無料提供。地区ボランティアセンターとして「ニーズとボランティアのマッチング」「気軽な相談」「交流」３つの機能の他、高齢者等買い物支援サービス事業、生活支援の窓口にもなっている。

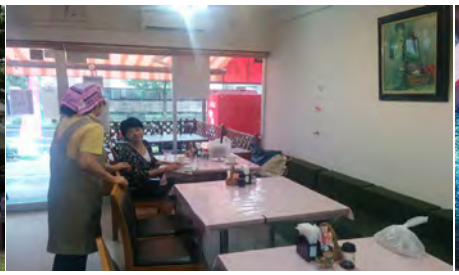
ほっとさこんやま　【旭区】

運営	NPO 法人オールさこんやま
所在地	旭区左近山 1-31-101（左近山団地左近山 ショッピングセンター内）
開設	2014 年 4 月
営業日	月～土 9:00 ～ 18:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 9 名、ボランティア 10 名
地域連携	住宅管理組合、連合自治会、地区社会福祉協議会、商店会、老人会、医療法人、ケアプラザ、都市再生機構、行政
まちの事務局機能	地区社協の生活支援「社協ケアシス テム」加入受付窓口
特徴	高齢化率 40％の大規模団地内の商店街空き店舗に開設された地域福祉交流拠点。運営する NPO 法人は、左近山連合自治会を中 心に、社協、民生委員、老人会、住宅管理組合、ケアプラザ、医療法人、商店会が集まって立ち上げた。高齢者、子育て世帯などの 多世代交流、地域全体が支えあえるつながりづくりを目指す。高齢者が引きこもらずに元気に過ごせる場所として、安価で飲食を提供している 。現在小学生対象の日曜ほっと（昔遊び）、小中学生への学習支援の実施また高齢者の移動支援を検討中

反町駅前ふれあいサロン　【神奈川区】

運営	反町駅前ふれあいサロン運営委員会
所在地	東急東横線反町駅前　改札口から徒歩 0 分
開設	2010 年 4 月 13 日
営業日	月曜日から金曜日 10:30 ～ 17:30　会議室利用は～ 21:00 土日も可能
スタッフ	神奈川区障害者地域作業所連絡会から、スタッフ 1 名メンバーさん数名 3 時には帰る。 ステーションボランティア午前 1 人午後 2 人
地域連携	運営委員会に町内会・自治会 商店街が加わっている東横フラワー緑道運営管理委員会や、フェスタ実行委員会などと連携
まちの事務局機能	運営委員会に区役所区社協も一緒になり多様な活動を繋げる拠点として運営
特徴	障害のあるメンバーさんが運営に関わっている。彼らの居場所にもなっている。スタッフに加えステーションのボランティアが一緒に運営しているのが大きな特徴。駅前なので利用者利用の仕方も多様

さくら茶屋にししば　【金沢区】



運営	ＮＰＯ法人さくら茶屋にししば
所在地	金沢区西柴 3-17-6（京浜急行金沢文庫駅徒歩 15 分）
開設	2010 年 5 月
営業日	さくら茶屋（日曜のみ休日）11:00 ～ 17:00　カフェ（土日祝日休業）10：00 ～ 17：30
スタッフ	常勤０名、非常勤・事務局８名、（有償）ボランティア８０名（時間当たり 50 円）
地域連携	西柴商店街、金沢区役所活動センター＆湘南八景ほっこり（つながり STA） 認知症カフェ問題で、自治会役員・地域ケアセンター・社協・民生委員など
まちの事務局機能	特に無し
特徴	少子高齢化が進む西柴団地で「西柴団地を愛する会」を発足させ、商店街の空き店舗を活用して地域住民が世代を超えて交流できる拠点作りを、まち普請事業に応募して開設。一年半後に運営組織を NPO 法人とした。事業内容は開店前に団地住民に行ったアンケート内容に応える形で展開し、コミュニティカフェ、朝塾、介護サロン 買物支援、西柴夜話、支え合いサロン、レンタルボックス、子どもイベント、健康維持活動などを行う。３年後には並びの空き店舗に２か所目の拠点、さくらカフェを開店した。2016 年さくら食堂月２回開催、2017 年 10 月から生活支援サービス補助事業を開始。

ほっこり　【金沢区】

運営	湘南八景自治会
所在地	金沢区東朝比奈 2-2-32（京急線六浦駅徒歩 18 分、又は金沢八景駅から京急バス 15 分）
開設	2012 年 6 月
営業日	火、水、木、金、土 10:00 ～ 15:00
スタッフ	常勤０名、非常勤０名、有償ボランティア 18 名
地域連携	地域ケアプラザ、さくら茶屋、区役所、社会福祉協議会
まちの事務局機能	特になし
特徴	地域の高歳化の進展に伴い、住民同士による助け合いシステムの必要性と阪神淡路大震災を機に独居高齢者等の見守りの必要性から、２度の住民アンケートを経て、自治会内の助け合いと見守りの仕組みと住民交流の場のニーズが見えた。自治会が、マンション１Ｆの店舗を購入し、まち普請制度を活用してカフェを開店。ボランティア組織「お助けマン」の事務局機能も果たしている。店舗内に乳幼児親子のスペースを設置し、多様な世代が集う場となっている。2013 年～ 2016 年は､金沢区民活動支援センターブランチ「つながりステーション」として、さくら茶屋、区役所と連携して、生涯学習に関する情報提供、相談などを実施。

UDCN　並木ラボ　【金沢区】

運営	横浜市立大学
所在地	金沢区並木 1-17（京急線富岡駅徒歩 14 分、シーサイドライン並木北駅徒歩 7 分）
開設	2014 年 3 月
営業日	不定期（原則、平日・土曜日 10:00 ～ 20:00 をコマ割で open）
スタッフ	駐留担当教職員 4 名、駐留担当学生約 15 名、駐留地元スタッフ 2 ～ 3 名
地域連携	連携・協力団体：地元地縁組織、地元 NPO、名店会、各種地区施設、区役所、市役所、UR、住宅供給公社等
まちの事務局機能	地域連携を意識しながら、各団体や、活動をつなげる場づくり。
特徴	地域再生・活性化の核となる大学を支援する文科省の「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」で、横浜市立大学が「環境未来都市構想推進を目的とした地域人材開発・拠点づくり事業」として、学生と地域をつなぐまちづくり拠点として開設。超高齢化社会への対応など全国に先駆けたモデルとなるまちづくりを研究実践する。 公開授業や健康講座、潜在的ニーズや課題の掘り起こしとそれに関する実践的調査研究の拠点として大学が活用するだけでなく、地域住民の持ち込み企画イベントやコミュニティカフェの社会実験運営、地元と共催での学生提案イベント企画なども実施。

港南台タウンカフェ　【港南区】

運営	株式会社イータウン（まちづくりフォーラム港南、横浜港南台商店会との連携）
所在地	港南区港南台 4-17-22-2F　（JR 港南台駅徒歩 2 分）
開設	2005 年 10 月
営業日	平日・土曜日 10:00 ～ 18:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 6 名、有償ボランティア 1 名、ボランティア約 10 名
地域連携	連携団体：株式会社と NPO と商店会の協働スタイル、他約 6 団体、協力団体：約 20 団体
まちの事務局機能	・横浜港南台商店会事務局（2005-）/ キャンドルナイト in 港南台事務局（2006-）/ 港南区民活動支援センターブランチ（2008-）/ 港南台まちある隊事務局 / ふ～のん編集委員会事務局 / 横浜市地域経済元気づくり事業（2008-2009）
特徴	「cafe から始まるおもしろまちづくり」をテーマに、県産材を活用したカフェサロンで小箱ショップやプチ教室、地域交流イベント、地域情報誌ふ～のんや地域情報サイト e-town の企画運営等を行う。学生や地域の主婦、小箱ショップオーナー、地元若手商店主らが主体的に関われる仕掛けづくりの実践を行う。2008 年より港南区民活動支援センターブランチとして、港南台地域元気フォーラムやキャンドルナイトなど地域連携相互支援を実践。

大倉山おへそ　【港北区】

運営	大倉山おへそ
所在地	港北区大倉山 2-5-11 （東急東横線大倉山駅徒歩 4 分）
開設	2014 年 1 月
営業日	平日・土曜日 10:00 ～ 16:00　（土日祝日は基本的には閉館）
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 0 名、有償ボランティア 15 名、ボランティア約 0 名
地域連携	エルム通り商店会、街カフェ大倉山ミエル
まちの事務局機能	商店会や、地域情報に関する「情報拠点」として機能。様々な活動のチラシ設置や、FB での情報発信などを実施。
特徴	ヨコハマ市民まち普請事業を活用し、地域住民と商店会、町内会が連携して開設したまちの拠点。商店会・大倉山地域のインフォメーションセンターであり、スペースレンタル運営、商店会イベントの企画運営としても機能している。「おへそ」は、大倉山の人と縁 (えん) をソーシャルで結ぶ、の頭文字。「地域商業自立促進事業」の採択を受け、グローカルプロジェクトと称し、特徴あるまちづくりを目指している。

街カフェ大倉山ミエル　【港北区】

運営	ＮＰＯ法人街カフェ大倉山ミエル
所在地	港北区大倉山７－３－３（東急東横線大倉山駅徒歩 17 分・地下鉄新羽駅徒歩 12 分）
開設	2010 年 11 月カフェ開設　　2011 年 12 月ＮＰＯ法人化
営業日	ギャラリーカフェ・夢うさぎ内レンタルスペースを利用　現在、週 5 日営業しております。
スタッフ	常勤 1 名（カフェオーナー）非常勤 1 名、有償ボランティア 10 名、ボランティア約 10 名
地域連携	エルム通り商店会、大倉山おへそ、ＮＰＯ法人ハッピーマザーミュージック 熊野の森もろおかスタイル、区役所、社会福祉協議会
まちの事務局機能	地域連携を意識しながら、各団体や、活動をつなげる場づくりと情報発信 大倉山夢まちづくり実行委員会、東急東横線各駅停車の会などに参加、
特徴	2010 年 11 月　横浜商建連携事業の大倉山はちみつプロジェクトのアンテナショップとして、「街カフェ大倉山ミエル」が商店会空き店舗に開店。カフェ、ボックスショップ、講座の 3 本立てで地域に開かれた、敷居の低い交流の場を作る。その後、「大倉山おへそ」がオープン。同時に、空き家を活用した、「まめどスペース結」の運営協力に伴い、カフェを「結」内に移転。2016 年 12 月「結」内のカフェレンタルの中止に伴い、2016 年からは、カフェを住み開きのサロン「ギャラリーカフェ・夢うさぎ」内に移転。週 5 回のカフェランチを始める。空き店舗⇒空き家(空きスペース)⇒住み開きのシェアカフェ、と移転と運営の実践を繰り返しながら、活発な市民活動がある地元の特性を生かして、地域情報の発信、新たな活動、連携を進めている。

いのちの木　【都筑区】

運営	NPO 法人五つのパン
所在地	都筑区仲町台 1-32-21（横浜市営地下鉄仲町台駅徒歩 3 分）
開設	2011 年 12 月
営業日	月～金 10:30 ～ 17:00
スタッフ	常勤 1 名、非常勤 1 名、有償ボランティア 2 名、ボランティア約 2 名
地域連携	葛が谷地域ケアプラザ、仲町台地区センター、港北ニュータウン聖書バプテスト教会、行政書士、併設しているヘルパーステーションと共に、弱さや障がいを担う方々の全人的な必要に応えるネットワークづくりを目指しています。
まちの事務局機能	仲町台地区センターと連携をして、仲町台を絵本づくりの街にする働きを推進中（やさしい絵本で街づくり）
特徴	「多世代ものづくり交流カフェ」として、布小物・ミシン ワークショップ、編み物と本づくりのプログラムが行われている。編み物サークルの参加者の中から、プロとして独自ブランドの立ち上げや、障害者の仕事づくりにも取り組む。徒歩圏に地域活動支援センター「マローンおばさんの部屋」も運営しており。「いのちの木」は、一人ひとりの特性に合わせて、企業と連携した福祉的なプログラムを生み出している。また、「やさしい絵本で街づくり」をテーマに地区センターと連携をして絵本づくりを推進し高齢者の役割を見出すことや障がい者の仕事につなげている。

シェアリーカフェ　【都筑区】

運営	ＮＰＯ法人 I Love つづき
所在地	都筑区中川 1-4-107（横浜市営地下鉄線中川駅徒歩 3 分ハウスクエア横浜内）
開設	2014 年 11 月
営業日	10:00 ～ 18:00　水曜定休
スタッフ	常勤 10 名、非常勤 0 名、有償ボランティア 0 名、ボランティア約 0 名
地域連携	参加：中川ルネッサンスプロジェクト、中川の街の活性化のための意見交換会 . 都筑の文化夢スタジオ運営委員会他
まちの事務局機能	タウンセンター子育て地蔵まつり実行委員会事務局、中川駅前商業地区振興会広報担当
特徴	1999 年都筑区の生涯学習の勉強会から生まれ、2003 年に NPO 法人化。地域まちづくりのキャリアを持つ NPO「I Love つづき」が、「地域の活動を発展させるために、心地よくシェアできる空間を提供する」をテーマに、住宅展示場とコラボして開設。地場産野菜や調味料等にもこだわったメニューを提供。アルコールも出している。コピー機やプリンター、リソグラフ等もあり、シェア・オフィス、コワーキングスペースの機能も提供。福祉作業所で作られたものを数多く取り扱う「横濱良品館」の商品展示販売も行っている。2017 年よりシェアするアトリエ、シェアトリエを開設。

コミュニティ＆シェアスペース　KOTOBUKI　【鶴見区】

運営	神道映利
所在地	鶴見区潮田町 2-98（JR 鶴見駅／京急鶴見駅より徒歩 13 分）
開設	2016 年 11 月
営業日	月曜～日曜　9:00 ～ 22:00（予約状況による）
スタッフ	常勤 1 名、ボランティア 2 名
地域連携	現在なし
まちの事務局機能	現在なし
特徴	「リソース（趣味、技能、経験）を誰かのために役立てよう」をコンセプトに、自分の価値、存在意義の確認、社会貢献の第一歩を実現する場。1 階はキッチン＆カフェスペース（最大２０席）。２階は１２畳のフローリングスペース。共に貸出可。ここで開く講座や交流会を通じてＪＯＹある暮らしを提供する。いずれ人材バンクのような会員化を図り、困っている人の“困った”を解消できる人とのマッチングで助け合いの輪をつくっていきたいと考えている。

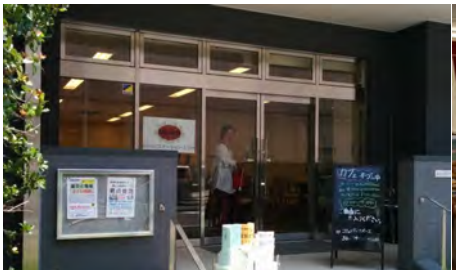
こまちカフェ　【戸塚区】

運営	ＮＰＯ法人こまちぷらす
所在地	戸塚区戸塚町 145-6- 奈良ビル２Ｆ（JR・横浜市営地下鉄戸塚駅西口徒歩７分）
開設	2014 年 5 月（現店舗。初めての開店は 2012 年 3 月）　2013 年 4 月法人化
営業日	平日・土曜　10:00 ～ 17:00　（定休日：日曜・祝日、第 3 月曜日）
スタッフ	常勤 3 名、非常勤 20 名、有償ボランティア 11 名、パートナー約 100 名
地域連携	NPO 法人子育てネットワークゆめ、とつか宿駅前商店会、戸塚宿ほのぼの商和会、戸塚東口商店会、戸塚区役所、横浜市役所、子育て応援隊、ケアプラザ、区民活動センター、区社協、男女共同参画センター、戸塚認知症キャラバン・メイト、自治会、横浜市内外企業等
まちの事務局機能	多様なテーマのイベント（産前産後、学び、コミュニティ、障がい、ものづくり等）を通して、今まで交差しなかった人同士や団体同士をつなげる機能。商店会事務局も務めている。フューチャーセッションの開催や地域のコーディネーター育成事業にも取り組んでいる。また、官民住民で出産祝いをつくりその過程で地域の母親たちが抱える“孤”育ての課題を共有し、日常の中で支える仕組みを考えるプロジェクト（ウェルカムベビープロジェクト）の事務局をつとめるなど、まちづくりへの提言も行っている。
特徴	ふらっと寄れるというカフェの機能とそこから担い手を発掘育成するという機能をワンストップでもつカフェ。コーディネーターがお客様に伴走し参画できる機会をコーディネートしていることが特徴。 2014 年横浜市まち普請事業の活用で現在の店舗を開店。食事や喫茶の提供、手づくり雑貨の小箱ショップ、会議室、レンタルキッチン等も有する。

コミュニティカフェ夢みん　【戸塚区】

運営	NPO 法人 いこいの家 夢みん
所在地	戸塚区俣野町 1404-6（JR 大船駅・JR 横浜市営地下鉄戸塚駅からバス「ドリームハイツ行」集会所前バス停）
開設	1996 年 4 月
営業日	月曜～土曜 10:00 ～ 16:00　日曜（月 1 回）
スタッフ	常勤０名、非常勤７名、有償ボランティア２０名、ボランティア約５０名
地域連携	自治会、深谷台地域運営協議会、福祉連絡会、介護福祉関係機関、区役所、区社協、地域ケアプラザ、小学校、俣野公園プレイパーク、地域作業所
まちの事務局機能	地域運営協議会の中で事務局担当
特徴	「人と人とがつながり誰もが生き生きと過ごせる居場所を地域の皆さんとともに創っていく」という法人理念をもとに、多世代交流サロンを運営。交流、趣味、健康、学びなどの曜日別介護予防プログラムを柱に、子ども将棋やおもちゃ広場など子供向けプログラム、ゆめサロンや介護者のつどい、地域向け講座などの認知症対策にも取り組んでいる。28 年度からは住民同士の助け合い活動「ボランティアバンク・えん」29 年度からは食事サービス「ドリーム地域食の会」と統合し、地域の高齢化による課題解決に向けて活動を広げている。担い手のほとんどが近隣地域の高齢者により運営されていて、自らの介護予防にもつながっている。

ふらっとステーション・とつか　【戸塚区】



運営	ＮＰＯ法人くみんネットワークとつか
所在地	戸塚区吉田町 104-1（JR・横浜市営地下鉄戸塚駅徒歩３分）
開設	2014 年 3 月
営業日	木曜定休（土・日・祝日も営業）10:00 ～ 17:00
スタッフ	常勤０名、非常勤０名、有償ボランティア 40 名、ボランティア約 40 名
地域連携	NPO・NGO 活動団体、地域活動団体、街の商店、近隣町内会、地域公的機関、大学ボランティアセンター、とつか区民活動センター、市内企業など
まちの事務局機能	地域の人、団体、活動などをつなげるまちの応援団としての機能 市民活動、地域活動、生涯学習活動、ボランティア活動などのコーディネート機能。 地域課題解決型としての子育て応援、シニア応援機能。
特徴	ふらっと自由に立寄れ、子ども、学生、子育て中のママ、おとな、お年寄り、在学・在勤の方など、地域に関わる様々な人が集い、出会いがある『みんなの居場所』というコンセプトで、分譲マンション 1 F に開設された地域の活動拠点。市有地売却にあたり行われた「公民連携による課題解決型公募モデル事業」で、三菱地所レジデンス (株) の地域交流拠点を有する集合住宅プランが採択された。拠点は地元 NPO「くみんネットワークとつか」が担い、多数のボランティア協力により運営がなされている。

ふらっとステーション・ドリーム　【戸塚区】

運営	NPO 法人 ふらっとステーション・ドリーム
所在地	戸塚区深谷町 1411-5（JR 大船駅・JR 戸塚駅からバス約 25 分、小田急・市営地下鉄湘南台駅バス停より徒歩 3 分）
開設	2005 年 12 月
営業日	平日・土曜 10:00 ～ 17:00　日曜 12:00 ～ 17:00　祭日休み
スタッフ	有償ボランティア約 40 名
地域連携	深谷台地域運営協議会
まちの事務局機能	
特徴	地域で誰もが生き生きと心豊かに過ごしていくことを実現するための皆の交流の場・居場所 サロン・マイショップ、情報・相談コーナー、見守り活動、各種イベント、講座、食を中心としたサロンがメイン活動。年間 15,000 名を超える利用者で賑わっている。 子育て中の親子に夕食（毎週火曜）を提供。総合事業サービス B 通所型支援を実施

ハッピースクエア　【保土ケ谷区】

運営	NPO 法人　リロード
所在地	保土ケ谷区天王町 1-30-17（相鉄線天王町駅徒歩 7 分）
開設	2007 年 10 月
営業日	営業日：火曜日～土曜日　12:00 ～ 19:00（日曜日・国民の祝日・年末年始は休業）
スタッフ	常勤 1 名、非常勤 2 名、有償ボランティア　0 名、ボランティア　約 7 名
地域連携	保土ケ谷区青少年指導員　民生児童委員　地域子育て拠点　地域サークル 保土ケ谷区社会福祉協議会 NPO 法人きてん　公益財団法人横浜市芸術文化振興財団（岩間市民プラザ）など
まちの事務局機能	特になし
特徴	地域の中高生の居場所機能が中心で、地域の子育て中のママ＋乳幼児～高齢者施設の利用者＋スタッフと幅の広い地域の方の寄り場ともなっていて、「共に過ごし、友に学ぶ場／地域で中高生が育つ場」となるコーディネートを行なっている。行政の補助事業であるが、登録制は採らず、地域の居場所の中で中高生が育つ形を目指している。また、居場所で付き合いの生まれた中高生たちの、地域での出番を創出し、活動していくことにも取り組んでいる。

コミュニティサロンおさん

【南区】

運営	社会福祉法人たすけあいゆい
所在地	南区南吉田町２－１７
開設	2012 年５月
営業日	月～金　10：00 ～ 20：00 （12 月 1 日～ 3 月末まで冬時間営業　10：00 ～ 19：30）
スタッフ	常勤 1 名、非常勤 4 名、有償ボランティア約 22 名、ボランティア約 2 名
地域連携	近隣小学校「まちの人たちを笑顔にするお茶出し作戦」「サンサンコンサート」 アフタースクール・キッズクラブ等放課後支援団体、近隣社会福祉施設：4 団体
まちの事務局機能	特になし
特徴	商店街の一角にある空き店舗を活用したコミュニティカフェ機能として、地元団体との懇談会から浮かび上がったニーズである、高齢者や障害者を問わない居場所機能、とくに子どもの居場所になるようにとの願いを受け、徐々に事業内容を広げている。横浜市と連携し、家庭環境等に何らかの困難を抱える子どもを主な対象とした居場所づくりについて「社会的インパクト評価モデル事業」を 2016 年 10 月末から開始し、夕食の提供、学習支援の提供を行っている。

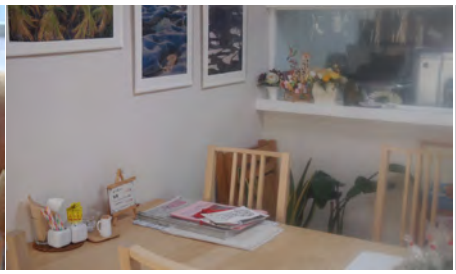
はまどま

【南区】

運営	ＮＰＯ法人よこはま里山研究所（NORA）
所在地	南区宿町 2-40 大和ビル 119（京急線南太田駅徒歩７分・市営地下鉄蒔田駅徒歩７分）
開設	2008 年６月
営業日	不定期（開催イベントに準じる）
スタッフ	有償ボランティア０名、ボランティア８名
地域連携	宮宿花一･二丁目町内会、蒔田公園愛護会、まいたエコサロンの会、フォーラム南太田、大岡川アートプロジェクト実行委員会、伊勢佐木町商店街エコ商店街委員会、タウンニュース南区編集室、そのほか市民活動団体など
まちの事務局機能	地元町内会の一員として、地域活動の広報やイベント等の企画・調整をお手伝いしている。一方で市内の環境系市民団体の中間支援、各種相談・コンサルティング等もおこなっている
特徴	法人事務所として借用していたスペースを、「街なかの里山の入口」として地域や社会に開き、人と里山をつなぐ居場所「はまどま」（横浜の土間の意味）として２～３日に１回の頻度で各種イベントを開催している。神奈川野菜の食事会や野菜市、発酵食や保全食づくり、竹細工などの手仕事、食事付きの映画上映会やサロンなどのほか、適宜、会員提案型の企画を実施。里山の恵みを分かち合い、この場に集う人びとの経験や技をいかした場づくりをおこなっている。「はまどま」は、ムラの寄り合い処・作業場という位置づけで、ここからヤマやノラに出かけて「里山とかかわる暮らしを」実践しようと都市的な里山暮らしを提案している。

カフェらいさー

【南区】

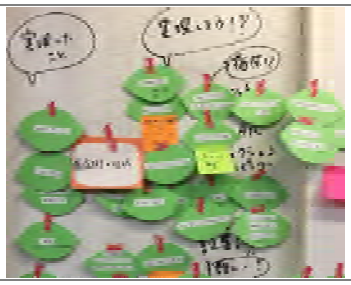


運営	合同会社カフェらいさー
所在地	南区日枝町 4-97-2
開設	2013 年 10 月
営業日	火、木、金、土　11：00 ～ 19：00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 1 名、有償ボランティア 0 名、ボランティア約 1 名
地域連携	横浜市男女共同参画センター、国際交流協会、小学校
まちの事務局機能	
特徴	食品添加物やアレルギーに配慮した食材を使用しています。 地域主催のイベントへの出店、近隣小学校の授業協力、地域カフェ等への商品提供。 カフェや飲食店の起業を目指す方からの相談受付や、練習の場として厨房の使用、スキル習得に必要と思われる講師等の紹介。

横浜コミュニティカフェネットワークについて

居場所やサロン、地域交流拠点などカフェ空間を活用して
地域の課題解決に取り組むコミュニティカフェ
地域と向きあい、実践者として取り組む
仲間からの声で、共に考え学び、高め合う
そんなつながりを目指して横浜コミュニティカフェネットワークは 2015 年に設立されました。

横浜市内には 50 を超える常設型のコミュニティカフェがあると言われています。
横浜コミュニティカフェネットワーク（以下 YCCN）はその中の 20 近くのコミュニティカフェ実践者や、支援者専門家などで構成されています。交流会や現場視察会などのネットワークづくりや学び合いの場としてささやかに活動していますが、２０１５年度からは３ヶ年で横浜市市民局との協働事業で、本事業でもあるカフェ型中間支援機能の創出・強化・普及事業を横浜市市民活動支援センター自主事業として、横浜市市民局との協働で実施しています。



コミュニティーサロン
おさん
いらっしゃいませ
出入口

カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及　啓発冊子

発行　横浜コミュニティカフェネットワーク・横浜市市民局

発行責任者　齋藤保

〒234-0054　横浜市港南区港南台 4-17-22　キタミビル 2F 港南台タウンカフェ内

TEL 045(832)3855　FAX 045(832)3864

発行日　2018 年 1 月 15 日

※本啓発冊子は平成 29 年度横浜市市民活動支援センター自主事業として発行しています